

②日本分類
65 A 31

日本国特許庁

①実用新案出願公告
昭44-29659

①実用新案公報

④公告 昭和44年(1969)12月8日

(全3頁)

1

④被覆管用接手

②実願 昭41-21037
 ②出願 昭41(1966)3月10日
 ⑦考案者 石井貞夫
 横浜市保土ヶ谷区柏町19の14
 ⑦出願人 株式会社三興
 東京都品川区東大井2の27の1
 0
 代表者 井本八郎
 代理人 弁理士 井上重三

図面の簡単な説明

図面は本考案の実施例を示す。第1図はダブルリングを用いた場合、接続された状態の半切欠せる側面図、第2図、第3図及び第4図はダブルリングを用いた場合、夫々半切欠せる他例の側面図
 第5図は第1図の接手の締付状態の拡大断面図、
 第6図は従来の接手の半切欠せる側面図、第7図及び第8図はシングルリングを用いた場合、夫々半切欠せる側面図、第9図は第7図のシングルリングを用いた場合の締付状態の拡大断面図である
 考案の詳細な説明

本考案は金属管を樹脂被覆により被覆せる被覆管を接続する際、金属管が外気などに直接さらされず保護されるようにしたものである。

従来の接手もこれらを解決するため種々工夫され製造されている。しかしながら接続に手間がかかり、高価であることや、簡便であつても不完全であつた。本考案は接続が簡便で手間がかからず安価であり、誘導管を接続する接手として理想的接手と云える。

次に図面について本考案を説明する。第1図及び第5図において、接手本体1と袋ナット2はねじ8で螺合し、背合せるリング3とリング4を締ける。接手本体1にはテーパー9が、又袋ナット2にはテーパー10が形成されている。金属管5は樹脂被覆6により被覆されていて、この被覆管7を流体使用機器(図示せず)に接続する場合に

2

内径の小なる外側面が甲丸形のリング3を金属管5に嵌め込み、又内径の大なる外側面が甲丸形のリング4を樹脂被覆6に嵌め込み、これらのリングの内側端面を互いに接合して、第5図に示す如くテーパー9と10とを甲丸形のリング3と4の外側面に夫々当て袋ナット2を右へ回し締付けると、リング3は金属管5に、リング4は樹脂被覆6に喰込み機器に確実に接続される。

従来の接手は第6図の如く金属管5'が本体1'に確実に接続されても被覆6'と接手部(図示の場合は袋ナット2')との間が離れて、金属管5'が露出したのでこの露出部分が外気などに直接さらされて腐蝕、電気導通その他の障害事故を発生した。

第2図は外周面がフランジ形の内径の小なる外側面を持つリング3aと内径の大なる外側面が甲丸形のリング4aを、これらのリングの内側端面を互いに接合して、リング3aを金属管5に、リング4aを樹脂被覆6に夫々嵌め込んだ場合である。

第3図は内径の大なる楔形リング3bを金属管5に、又内径の小なる楔形リング4bを樹脂被覆6に夫々嵌め込んだ場合である。

第4図は金属管5に甲丸形のリング3cを嵌め込み、又樹脂被覆6の端面と外面に楔形リング4cを嵌め込み、この楔形リングの左側傾斜内面をリング3cの右側甲丸部に接合させ、本体1に袋ナット2を右回して締付けるとリチグ3cと4cの内側端部が金属管5と樹脂被覆6に喰込み密着する。

第7図は、リング3を1個用いて第1図について説明したと同じ作用効果を有するようにしたものである。即ちリング3は外周面が甲丸形に形成されており、内周面は左半部が金属管5に嵌め込まれる小内径孔を形成しており、右半部は樹脂被覆6に嵌め込まれる大内径孔を形成している。

第8図に示すように本体1のテーパー9と袋ナット2のテーパー10にてリング3の両端部を挾圧し第9図破線の位置より実線の位置に加圧変形

3

4

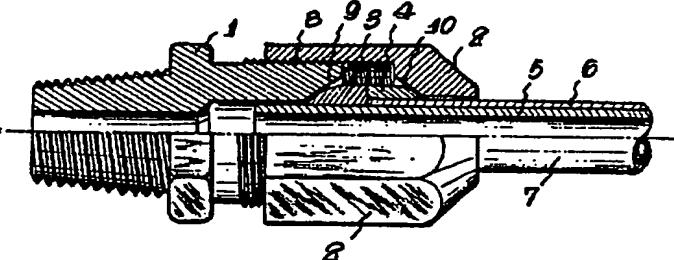
する。するとリング3の両端部は実線にて示す如く変形して金属管5及び樹脂被覆に深く噛込み一体化される。

実用新案登録請求の範囲

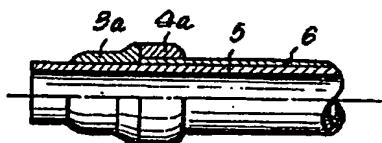
本文に詳記するように一側を金属管に嵌め込む5小内径とし、他側を樹脂被覆に嵌め込む大内径と

したリングを設け、該リングを互いに対向する方向に拡がるテーパーを有した継手本体と袋ナットとそのテーパー間に介在してなり、上記袋ナットを継手本体にねじ付けてリングの両端を金属管と樹脂被覆に噛込ませて本体、袋ナット及びリングを一体に構成するようにした被覆管用接手。

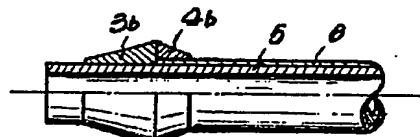
第1図



第2図



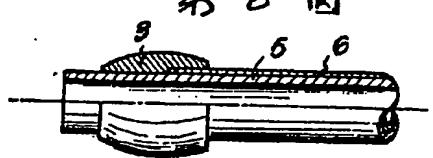
第3図



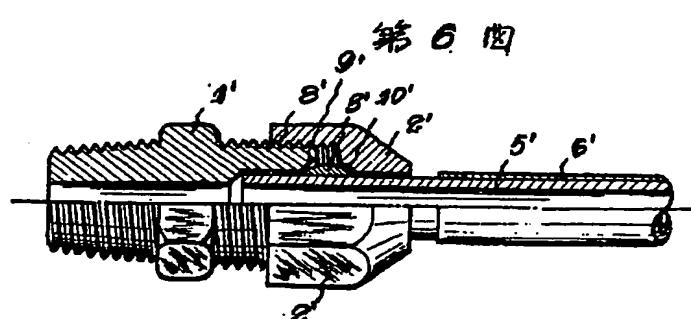
第4図



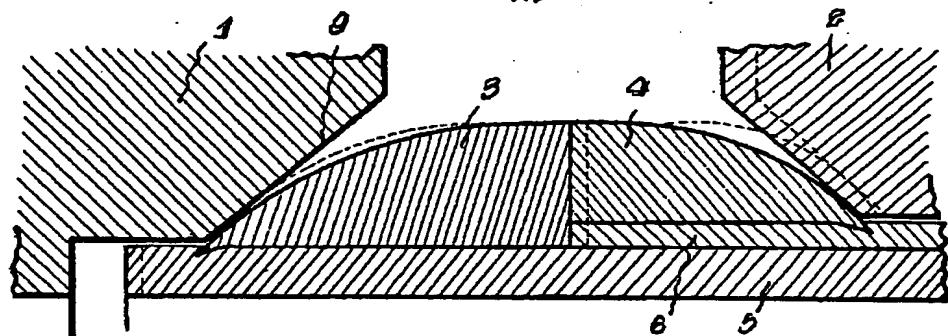
第5図



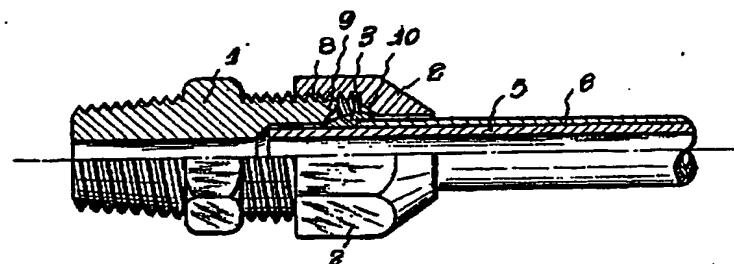
第6図



第5図



第7図



第9図

